

公表

児童発達支援 事業所における自己評価総括表

| | | | |
|----------------|-------------|----|-------------|
| ○事業所名 | 長岡療育園通園センター | | |
| ○保護者評価実施期間 | R7年 12月 22日 | | ～ R8年 2月 6日 |
| ○保護者評価有効回答数 | (対象者数) | 6 | (回答者数) 4 |
| ○従業者評価実施期間 | R7年 12月 22日 | | ～ R8年 1月 9日 |
| ○従業者評価有効回答数 | (対象者数) | 17 | (回答者数) 17 |
| ○事業者向け自己評価表作成日 | R8年 2月 6日 | | |

○ 分析結果

| | 事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること | 工夫していることや意識的に行っている取組等 | さらに充実を図るための取組等 |
|---|---|--|--|
| 1 | 重症心身障がい児を対象とした児童発達支援センターであり、長岡市を中心に、圏域の重症児の発達支援の中核を担っている。 平成2年よりA型通園を開始。本体施設は療養介護、医療型障害児入所支援施設であり、多くの経験から培われたノウハウを療育活動に活かしている。 | 医師、看護師、保育士、介護福祉士、社会福祉士、理学療法士、作業療法士、管理栄養士等の多職種が連携しながら専門的な支援を実施している。 | 研修や研究発表の場を活用し、支援方法や療育活動の展開方法において、新しい考え方も取り入れアップデートしていく。 職員間で建設的な意見交換ができるように、多職種間でのコミュニケーションを密にしていく。 |
| 2 | 家族支援について、「長岡療育園家族会」や「重症心身障がい児者を守る会」と協力している。 医療的ケア児支援センター「ゆいにじいろ」が同じ建物内にあり、協力関係にある。 | 在宅交流会やきょうだい児を対象にしたイベントを実施している。 「ゆいにじいろ」の実施しているイベントや研修会にも、通園センター利用児や家族が参加しやすい環境になっている。 | イベント後の振り返りを行い、次回開催に役立てる。広報誌等を活用し、イベントの楽しさを大勢の児童、ご家族にお伝えする。 イベントや研修会に参加しやすいように、早めに案内を配布する。 |
| 3 | 児童発達支援センターとして、地域の事業所のスーパーバイズ、コンサルテーションの一助になっている。 | 長岡市子ども家庭センターや、長岡市に存在する他児童発達支援センターと共同で、勉強会やグループワークを実施。 | 長岡市自立支援協議会に子ども部会が設定されていないため、勉強会を継続することで、市内の事業所間で顔の見える関係を構築し、地域課題の洗い出しを行う。 ワーキングに相当する「医ケア会議」の中で、重症心身障がい児や医療的ケア児に特化した地域課題へ対応する。 |

| | 事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること | 事業所として考えている課題の要因等 | 改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等 |
|---|---|---|---|
| 1 | 地域の子ども園との交流を含め、地域参加の機会が少ない。 | 重症心身障がい児や医療的ケアが必要な児が主な対象となっているため、地域参加において制約が多い。 コロナ禍以降、不特定多数の人と関わることに慎重に対応してきたことも要因。 | 法人全体で行っているイベントや地域のイベントへの参加を促す。 交流会のイベントを活用し、地域に遊びに行く。 |
| 2 | 利用定員は生活介護、放課後等デイサービス、児童発達支援の多機能合算で20名。超過枠を活用しながら受け入れを行っている。支援学校が長期休暇に入ると、活動場所等の工夫が必要。 | 登録人数に対する定員数が不足している。長期休暇時は希望の段階で定員の超過枠さえも超えてしまう。 | 生活介護20名、放課後等デイサービスと児童発達支援の多機能合算10名へ定員変更し、全体での受け入れ可能人数を増やす。 職員採用が少しでもスムーズになり、入職した職員が定着するように、法人全体で取り組むことが必要。 |
| 3 | | | |